

論 説

昭和大学学士会例会での
医学部学生による口演の展望
—第375回昭和大学学士会例会にて—

阿部 祥英^{*1)} 山本 眞琴²⁾ 渡邊 佳孝³⁾
金澤 建¹⁾ 里 美貴⁴⁾ 安原 努⁵⁾
福地 邦彦⁶⁾

実際の患者に接し、臨床現場での経験を得るため、医学部学生には各診療科での臨床実習が課せられている。多数の診療科があり、各診療科単位では教員と医学部学生が共有できる時間は限られる。一方、限られた時間であっても秀でた学生の存在に教員が気付かされることがある。口頭試問に適切に回答できるほか、知識が初期臨床研修医だけでなく専攻医や教員を凌駕していたり、学生の疑問や質問が、臨床現場の問題点を捉え、教員が即答できないものであったりする場合である。頻繁ではないが、そのような学生に遭遇した際、視野を広げる他の機会を与えられないかを思案してきた。

今回、その機会として「CTX-M-55型基質特異性拡張型βラクタマーゼ(ESBL)産生大腸菌が分離された上部尿路感染症の一乳児例」という演題を用意し、医学部学生に本学士会での口演を依頼した。その経験と展望について報告する。

対象になった学生は、2021年2月、医学部4年次に江東豊洲病院こどもセンターの臨床実習に参加した。指導教員として川崎病、黄疸、Prader-Willi症候群に関連する質問を受け、その学生の有する知識が、標準的な学生のそれを凌駕していると感じた。また、一般的な臨床実習を終えるだけでは満足させられないと考え、本学士会での口演による症例

報告を提案した。

この取り組みの開始にあたっては、指導教員が提案した題材に対して学生の快諾を得ることが前提である。臨床実習期間に実際に担当した患児ではなかったが、医学部学生にとっては、小児の尿路感染症、薬剤耐性菌、文献の検索方法に関する学習ができるほか、それに派生して、厚生労働省の推進するワンヘルス・アプローチ¹⁾の重要性を学べる利点があった。同時に、指導に際しては、本来の学業を侵害する過負荷にならないこと、医師国家試験出題基準を逸脱しないこと、発表の準備に際してハラスメントが生じないことに配慮した。

5年次に進級した上記の学生に対し、実際の準備は以下のように行った。指導教員が抄録を作成して2021年6月10日に本学士会への演題提出後、症例の病歴要約と参考文献、発表用ファイルの下書きをEメールで共有した。学生が発表ファイルに必要な事項を記入し、指導教員が修正や追記を行い、Eメールで修正箇所を共有した。学生の臨床実習終了後、昭和大学病院(6月25日)と昭和大学江東豊洲病院(7月1日)で1回ずつ約1時間の面談で口演の予行演習を行った。口演用ファイルを供覧し、初回は学生自身が作成した原稿を読みながら7分の制限時間内に発表できたが、2回目は原稿を目視しなく

¹⁾昭和大学江東豊洲病院こどもセンター

²⁾昭和大学医学部5年生

³⁾昭和大学横浜市北部病院こどもセンター

⁴⁾昭和大学薬学部臨床薬学講座薬物治療学部門

⁵⁾昭和大学大学院保健医療学研究科

⁶⁾昭和医療技術専門学校

*責任著者

〔受付：2021年7月8日、受理：2021年7月26日〕



図1 医学部学生による口演発表

医学部5年次在学の当該学生は2021年7月3日、第375回昭和大学学生会において一般演題として“CTX-M-55型基質特異性拡張型βラクタマーゼ（ESBL）産生大腸菌が分離された上部尿路感染症の一乳児例”を発表した。

でも発表できる水準に達していた。会場から出された質問に対する回答は指導教員の援助を要したが、発表当日（7月3日、第375回昭和大学学生会例会、図1）の発表も流暢に終えることができた。演題提出から口演までの期間は1か月未満である。

昭和大学江東豊洲病院こどもセンターでは今回の取り組みを継続する。診療技能の向上のみならず、学会や研究会での症例呈示も医師として習得すべき能力である。特に、卒前でそれを経験するのは中学校教育における職場体験²⁾や臨床実習と同様の効果を期待できる。発表者の学生だけでなく、指導教員にも利点がある。教育活動や指導力の見直し、学生の疑問点の共有、講座の臨床研究推進の契機になり、いわゆる win-win の関係を構築できる。発表内容が患者の利益や医学の発展に供するもの、医師、学生以外の他職種も関わるものなら、二者ではなく、三者以上の total win を目指すこともできる。

今回の取り組みの対象になった学生は、指導教員の主観によって選抜された。客観的な選抜基準がなく、今後は公平性の観点からそれを求められるかもしれない。しかし、今回の取り組みや、それに関わる者が第三者の評価対象になることは望まない。評価されることによってインセンティブが生じると、

それを求めることが動機になってしまい、学生や指導教員の自主性や主体性が失われるからである。実際、本学士会での発表も小児科の臨床実習期間の後に行われた。つまり、臨床実習の評価には反映されず、学生の自主性が重んじられた。

第375回昭和大学学生会例会では、医学部学生による発表は一演題のみであった。今回の取り組みが医学部全体に浸透し、同様の機会を得た学生が増えれば、さらに学生同士、指導教員同士の向上心を刺激できる可能性がある。今後、本学士会での口演発表に留めず、同学生による日本病院総合診療学会での発表と症例報告として論文作成を計画している。

今回の経験により、一部の医学部学生は上記の取り組みを成就できる能力があることを確信した。関わった学生の意識変容や行動変容を生むかは、今後を見守りたい。

文 献

- 1) 松永展明. 抗菌薬の適正使用と院内感染対策について考える. 薬剤耐性 (AMR) 対策アクションプラン 2016-2020 ワンヘルスアプローチの取り組みについて. 小児臨. 2018;71:2493-2500.
- 2) 文部科学省. 中学校職場体験ガイド. (2021年7月3日アクセス) https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05010502/026.htm